

NPO法人自殺防止ネットワーク風
第2回自殺予防相談員育成講座「相談員の心得」



秋田県藤里町 白神山地岳^{だけだい}岱風景林

平成27年3月



第2回自殺予防相談員育成講座「相談員の心得」

平成 27 年 2 月 18 日 18 : 30 ~ 20 : 40 / 千葉市文化センター



袴田俊英 氏

袴田俊英(はかまだしゅんえい) 秋田県月宗寺住職。1958年(昭和33年)生。駒沢大学仏教学部仏教学科卒業後、曹洞宗大本山永平寺安居。曹洞宗秋田県宗務所教化主事。2000年藤里町教育委員長。同年「心といのちを考える会」会長。2008年「自殺予防 秋田こころのネットワーク」事務局長。2010年同会長。NPO法人自殺防止ネットワーク風副理事長。日本赤十字秋田看護大学非常勤講師。



コーディネーター 篠原鋭一 氏

篠原鋭一(しのはらえいいち) 千葉県長寿院住職。1944年(昭和19年)生。1967年に駒澤大学仏教学部卒業。曹洞宗総合研究センター講師。1995年から自殺を救済する活動をはじめ。NPO法人自殺防止ネットワーク風理事長 著書「この国で自死と向き合う」(ヒトリシャ)「もしもし、生きてていいですか?」(ワニブックス)「どんなときでも、出口はあるよ」(WAVE出版)他

第2回自殺予防相談員育成講座 目次

はじめに 篠原鋭一氏	2 P
自殺予防相談員の心得 袴田俊英氏	3 P
○秋田県藤里町	3 P
○民学官で自殺対策	5 P
○宗教的痛みと「ビハーラ」活動	5 P
○コーヒーサロン「よってたもれ」	6 P
○秋田こころのネットワーク	8 P
○藤里町社会福祉協議会	9 P
○働く場 「こみっと」づくり	10 P
○自分の中の当り前を問い直す	12 P
○4つの文化バランス	13 P
自殺予防相談員の心得 質疑応答 袴田俊英氏、篠原鋭一氏	15 P
ご参考 我が国における自殺の現状	22 P
NPO法人自殺防止ネットワーク風法人概要	23 P

はじめに

篠原：皆さん、今晚は。

本当に寒くて、足下の悪い中、お集りいただきましてありがとうございます。

今日は秋田からおいで下さいました禅僧・袴田俊英先生にお話いただきます。自殺防止活動を中心にした袴田先生の活動は全国で非常に注目されています。

ご承知の通り、高齢者の自殺問題が非常にクローズアップされています。年間約3万人の方々が誰にも看とられる事なく、ひっそりと亡くなっているということですが、これを孤独死、あるいは孤立死という言い方をしています。

2015年の統計ですけれども、一人暮らしの高齢者は、全国で600万人。その方々の多くは東京や大阪をはじめとした都会です。高度成長期に建てられた大規模な集合住宅入居者の高齢化が進んでいることが大きな原因です。高齢の方とお話ししますと、ひとりで死んでいいからほっといて欲しいとおっしゃる方もおいでになりますが、私は一概に孤独死という言い方がすべての方にあてはまるとは思っていません。しかし、実際は孤独死される方は3万人～3万2千人ということでございます。

先日、東京新宿で高齢者を支えておいでになった元ケアマネジャー、現在は淑徳大学社会福祉学部の結城康博先生にお話をうかがう機会がありました。結城先生からこういうコメントを頂きました。「孤独死になるのではないだろうか、という人を実際に先に発掘して、その人に支援のサービスをする。これは社会がやっていく、ある意味、助けて欲しい人を助けるのではなくて、助ける必要のある人を、先に見つけて支援をしていく。これがアウトリーチですので、このアウトリーチをもっと機能させていくことが孤独死・孤立死対策になる」とおっしゃいました。

アウトリーチをどう訳すか、一番合うのは、「外から我々が、第三者が寄り添う」という意味合いで受け取ったらと思うのです。皆さんご承知の通り全国的に過疎化が進み、限界集落という言葉もあるのです。高齢者の方が1人でお暮らしになることが年々増えている。ところが、ご家族といっしょに住んでおられても、高齢になると不安・孤独をかかえてしまわれて、最終的に自ら命を絶つ方々がおいでになることも事実です。

そういう現状を見つめて、袴田先生にお願いを申し上げました。袴田先生は、世界遺産・白神産地の麓、秋田県藤里町というところでひとつの取組みをなさっています。それは明らかに高齢者の自死防止対策に大きい意味を持った活動です。去年お訪ねいたしまして、ご活動の内容を拝見して参りました。

現場で直接問題を解決することが、我々民間団体にとって重要だと考えておりますので、袴田先生の現場での取組み、日本中が注目している藤里町という、ひとつの町の取組み、あるいは、行政の方との、そして民間との、あるいはお坊さんであるとか、そういう声を聞いていただきまして、皆様方それぞれの活動の参考にしていただけたらと思います。

それでは、袴田先生、宜しく申し上げます。

自殺予防相談員の心得



袴 田：今晚は、秋田から参りました。秋田より寒いですね。

○秋田県藤里町

藤里町という秋田県の一番の県北、白神山地という世界遺産を挟んで青森県という、小さな町に住んでいます。その藤里町で自殺対策をやってきましたが、最近若い人のひきこもり対策、若い人だけでなく、中高年までのひきこもり対策をやっています。この二つ、多分考え方は同じなんだろうなと思ってます。私も社会福祉協議会で活動しておりますので、今日はこの二つの活動をご紹介します。与えられた演題ですが、「自殺予防相談者の心得」ということで、演題は変えてもいいよと言われたんですが、ちょっと考えるところがございまして、このままにしようと思います。

最初のご挨拶で篠原さんが仰られたように、アウトリーチという考え方があります。専門家の人達は能動的にアウトリーチをしていこうとしています。私達、普通に生活しているものはどう考えればいいのか。そうすると、その普通の人達と一緒に「相談」をしている私たちはどう考えればいいのかということについて、社会福祉協議会の活動に改めて考えさせられたものがあるので、そんな話ができればなと思います。

先ず、私が住む秋田県、平成7年から自殺率が全国1位です。これは秋田県と全国の自殺率をグラフにまとめたものになります。1955年からなので、昭和30年、実は秋田県の自殺率は全国平均以下だった。昭和40年から平均を上回り、この年を境に変わってくる。



この時に農村でなにが起きたかという、農村が近代化された時期なんです。農村も近代的な住宅に住み、機械化を進めなければならない。これが、佐藤栄作さんという首相の方針だった。佐藤さんの前の首相が池田隼人さん。所得倍増という政策を打ち出しました。所得倍増計画によって、ちょうど今の中国のようにものすごく経済発展をしたんですね。その時、田舎と都会

の格差が広がってしまった、それから公害問題が起きた。佐藤栄作さんは東京オリンピック後、すぐに池田さんから首相就任をもちかけられるんですが断り続け、年明け前にやっと首相を受けます。そこで出したのが「社会開発」という政策でした。それが農村の近代化を生んだ政策でした。その時に実は秋田県だけでなく日本の農村が変わったんですね。

潤沢にお金を農村に入れました。低利子でお金を貸したんですね。それによって機械化を進め、住宅の近代化を進めた。茅葺き屋根だった農村の住まいが、みんなトタン屋根になった。その結果、それまでは皆して結（ゆい、共同作業制度）という形でやっていた農作業が、それぞれの家でやるようになった。ですけど、その原資は借金ですので、返さなければいけない。それで出稼ぎが始まったんです。出稼ぎというのは、労働力を都会に集約して近代的な都市を作り、それによって人々は現金で生活する社会になった、ということです。

それまで農家の買い物とは、お米の代金が入った時に一括して払うということだった。ツケです。通い帳というのを書いて、それで普段の買い物をして、お米の代金が入ってから支払うという生活をしていた。それが現金払いになったということです。何より子供達が皆「買い食い」するようになった。うちから帰って来たら、それまでは「ただいま」って帰ると、おばあちゃんくらいは残っていて、味噌をつけたおにぎりを作って、腹ごなししてからそれから遊びに行った。けれども、出稼ぎが当たり前になったら、おばあちゃんが暗くなってからじゃないと帰ってこない。みんなお金を持って「買い食い」をするようになった。そしたら、お金の力を小さい頃から見せつけられたんです。お金をもてば消費者ですから、扱いが大人と変わらない。それから、好きなものを好きなときに買えるということ。これで農村は精神的にも経済的にも、社会的にも変わったんですね。

都会の方で今、孤独死が問題になっているのと同じことです。経済的には発展が遅れている農村は収入が少なく「仕方なく」3世代で同居しています。けれど、家庭の中で孤立している状況は都会と変わらない。高齢者の人達の自殺が非常に高いのが秋田県の特徴です。しかも、高齢の女性の自殺の率が高い。数的にそんなに突出して高いのではなく、その年代の人口で割ると、自殺率が高い。女性の方が長生きするということ、家庭の中で働く場もなくなって、家族のためになにかをするということがなくなってしまったせいでしょうね。

2003年が自殺率のピークになっています。秋田県の自殺対策は始まったのは2000年の時からです。2000年から、秋田県は県をあげて自殺対策をした。対策は打つんですが、はじめのうちは全然下がらないんです。効果が持続的であったとはいえない。残念ながら一昨年まで自死率、自殺率は、全国1位です。ただし、秋田県はこのところ下がり続けている。これ最近5年間のデータなんですけど、ピーク時が警察発表で577人、それが今年のデータ速報値で277人、亡くなる人が半減している。自殺率の方は、まだデータは出ていません。厚生労働省発表の人口動態統計ではっきりするのですが、今のところ警察のデータ概算でいうと秋田県は3位、山梨県が1位、いわゆるホットスポットのデータが入ってくるのでどうしても高くなる。例年は次が秋田県なんです。今年は岩手県でした。震災の影響もあって高いという推測もあります。ただし、被災地で出てる訳ではなく、その周辺なんです。多くなっているのは。被災地のケアをすることによって、実は通常やっている自殺対策がちょっと手薄になったんじゃないかという推測もあります。震災の影響があったということなので、手放しには喜べないけれども、秋田県はとにかく自殺率が下がり続けているということです。

○民学官で自殺対策

秋田県の自殺対策の特徴というのは、民学官の連携ということです。民というのは、私ども民間団体、日本で一番民間団体やNPOが多いと言われています。一市町村のひとつやふたつ、必ずという感じで民間団体があります。それから、学です。秋田大学医学部を中心とした研究機関というのが基礎調査をやってくれるんですね。全市町村で「うつ尺度テスト」を行い、それをフィードバックするために小さな集落ごとで説明会をするというようなことをしています。それから、官です。秋田県には、県庁の2階に自殺対策班という看板があります。こんな県はないと思うんです。自殺という文字が看板になって掲げられている県は。これが秋田県の特徴です。

一番目の医療モデルというのは、例えば精神科医などがこの人は自殺の危険因子をいっぱい持っているんじゃないかということ早くに察知して、手だてを打っていかうという専門家のモデル。福祉モデルというのは例えば、生活困窮者であれば、その人達にこういう制度があるよと。例えば、精神疾患を持っている人に対しては、こういう制度がある、ソーシャルワーク的なのが福祉モデル。この2つは専門家の人達が関わってくる。

もう1つが社会モデル。社会に住んでいる私達一人一人がどう向き合うのか。どう社会を巻き込みながらこの自殺対策をやっていくのかというモデルです。実は、この社会モデルというのが秋田県で模索してきたモデルです。医療モデル・福祉モデルがしっかりしていないと、社会モデルはできないんです。これがちゃんとうまくいってる時に、「この問題をタブーにしないで、みんなで考えましょうよ」ともっていかないと、この自殺という問題は実は解決の糸口が見えないのではないかと考えています。

○宗教的痛みと「ビハーラ」活動

秋田県の活動を紹介するとともに、私がどうしてこの活動に携わったかを紹介します。自己紹介がてらに…。

まずは私、実はターミナルケアに最初興味を持っていました。ターミナルケアというのは、ガンを宣告されて、余命何ヶ月になったら延命はせずに、その人が充実した人生の終わりを迎えられるようにというケアです。そのようなケアをする施設ができてきた時に、私はこれに興味を持ちました。

そのころ言われていたのは、亡くなる人には4つの痛みがあって、そのうちの1つに宗教的な痛みがある。宗教的な痛みを解放するには、宗教者が必要である。その当時のターミナルケアというのは、そのような考え方がありました。それで、宗教職としてそれにどう関わればいいのかなどと思いました。まだ若かったので、よく東京・京都で勉強会がありまして、そちらにいつ勉強しているうちに、秋田に「ビハーラ」という会を作りました。お聞きになったことがあるかどうか分かりませんが、ホスピスに代わる言葉です。ホスピスはキリスト教の教会が設置する病院、今ですと私立病院にも置かれたりします。非常にキリスト教系の言葉になってしまうので、仏教、お寺の人達が携わるには、別の言葉がいいということで「ビハーラ」という言葉が使われるようになりました。

新潟県の長岡市にビハーラという病棟を持っている長岡西病院というところがあります。そこが先駆的なところだったのですが、そこに行ったりしているうちに秋田でもビハーラという活

動を立ち上げることになりました。今でもずっと続けているのは、このホスピス法話会です。宗教的な痛みがあるといいながら、日本人は亡くなる時に枕元にお坊さんに来て欲しいという要請はほとんどありません。でもお話は聞きたいんですね。こういうホスピスのなかで、車椅子の人や歩ける人は自分達の手で歩いて、そこでお話をします。要は自分がそれまでにお寺さんとの付き合いのなかで、いろいろな話をしてきた。それが「日常」から離されてホスピスというところに入っちゃったら、その「日常」を感じられる時間がなくなった。そこへ私達が行くと、なんとなく話も聞いてくれるし、お茶を飲みながらいろいろな話もする。いわゆるチャプレンが行うような、キリスト教のほうでいうホスピスでの活動とはちょっと違う活動をやっています。

ビハーラは平成4年に作りましたが、平成5年に自殺と向き合うことになりました。秋田大学医学部の法医学教室の教授だった吉岡先生という方が平成5年に冊子を出されたんです。「秋田の憂鬱を考える」という冊子でした。法医学教室というのは、解剖をするところですね。死体検案というものをするのですが、その検案のかなりの数が自死なんですね。どうしてこれが多いか調べてみた。先生は新潟出身の先生でした。平成5年、6年は新潟県が自死率1位で、その前の年は2位だった。自分は秋田大学、出身は新潟で、興味を抱いているんなデータをまとめられた。県別もそうですし、様々な細かいデータをまとめて冊子を作られました。ビハーラは終末期医療・ターミナルケアに向かっていたんですが、秋田の現状を知ろう、吉岡先生のお話を聞いてみようと思ひまして、セミナーを開きました。私はすごくショックでした。個人的に、この問題に向き合ってみようということで、平成5年から、吉岡先生の作った「秋田の憂鬱を考える会」に入りました。そこで様々なデータや県民性を勉強するようになりました。そのうちに藤里町でなにかできないかと思ったんですね。ちょうど平成7年、自殺率が1位になった時でした。

○コーヒーサロン「よってたもれ」

「秋田の憂鬱を考える会」にはメンバーにはいろいろな人達がありました。県庁職員、マスコミ、精神科のお医者さんなど。そういう人達が、この年にそれぞれの自分の持ち場でなにかしようということで、予防のために活動を行うことになりました。私は藤里町を予防活動の現場に選びました。当時4,200人くらいの人口、今3,600人くらい。小さい町なんですけど、小さいから、名前まではでてこないけど顔見知りな訳ですよ。非常に濃い関係性、この関係性のなかで、自殺防止をやらないといけないんじゃないかなと、なんとなく思いました。

なぜならば、藤里町は関係性が近いからタブーがきつかったんです。これは問題にしちゃいけない。痛んでいる人がここにも、そこにもいる。自死率が高かったんで、関係している人達が多い。だからこの話は、問題にしないことが優しさだという雰囲気がありました。けれども、この町でこの問題を考えていこうと考えました。会員は30人くらいいて、たまたまこの時になにかのイベントがあつて、参加してくれたのがこの写真に写っている人たちです。見てお分かりのとおり、高齢です。皆高齢で、7、8年前ですから亡くなった人もいます。それから、皆さんそれぞれに相応に年をとっていきます。そういう人達が集って来て、コーヒーサロン開いています。会を作ってから数年はものすごいバッシングを受けて、コーヒーサロンになんかやれませんでした。あんた達がこういうことを問題にしたから自殺増えたんでしょと。それ

まで年平均3人くらいでした。ところが問題にしたらその後の2年間、平成13年、14年と、ひとり多く年間4人となりました。問題にするからだめなんだ、これは問題にしないほうがよかつたんだという風当たりが強かつたんですね。数年は穏やかな勉強会をしていたのですが、もう覚悟したんです、私達は。「叩かれるのはしょうがない。」ということで、コーヒーサロンを始めました。

コーヒーサロンは、皆が来て、お話をしているところにしよう。私達は専門家ではないので、本当に井戸端会議というか、縁側で話をするような場所にしようということで、「よつてたもれ」と名付けました。秋田弁で「寄つてつて下さい」という意味です。京都の古語がそのまま流れて来て、賜われの訛つたのが「たもれ」。それで、寄つてつて下さい。これを始めました。・・・町で一番新しい「三世代交流館」のロビーで毎週火曜日1時半から4時まで、お正月・お盆を除いて必ず開催していました。テーブルクロスなどを手作りで、コーヒーカップもうちで使つてないものを持ち寄つて。コーヒーメーカーを使っているんですが、これはお葬式の引き出物です。お坊さんの仲間に頼んで。コーヒーメーカーだったら、淹(い)れる人によって味が変わるということがないので、豆が同じであれば、同じ味。最近は被災地に行ったりするために大きいコーヒーメーカーを買いました。1回で20人から30人分できるようなものです。

1人100円だけ、カンパという形でお金をいただいている。定価をつけると保健所に申請しなければいけないから、それで、カンパという形でお一人様100円いただいて、運営資金にあてています。これをやりましたのが平成15年、16年に自殺で亡くなつた方がおりませんでした。その後、17年2人、18年2人と平均より低い状態で推移していきんですが、平成19年に5人亡くなりました。5人亡くなると藤里町の自殺率は240くらいになります。全員男性で、20代から70代で本当に年代に偏りがありません。コーヒーサロンの常連さんは男性が結構いるんですね。このほかに研修会だとかフォーラムだとかいろんなことをやっているんですが、そういうのはなかなか参加してくれない。1度夜に男性向けの講演会をやりましたが集まってくれない。晩酌してるんですね。だったら私達も一緒に晩酌しようということで、小さな集会所に行って、一緒に酒を飲もうということをやっている。「赤提灯よつてたもれ」と名付けました。あんまりお金がないので、一番安い発泡酒と焼酎の紙パックに入ってるものと、乾きものを小さな集会所に持って行って、そこで一緒に晩酌をやるんですね。ということをやっていたら、みんな自分のことを喋るんです。お酒飲むと男性っていうのは、自分が苦労した時のことを喋りたいんです。だけど、家では皆聞き飽きている。それを喋り出すとくどくなつた、酔つたと、酒を下げられちゃう。こういうところだとおおっぴらに喋れるんです。そこで一人一人が自分のことを語る時間を必ず持ちました。出稼ぎに行った話や一番苦労した話をする。それを皆して聞く。そういうふうなことを始めました。藤里町で平成20年にこれを始めたんですが、次の年の統計で、平成20年は0になりました。

最近になって、秋田県藤里町はまた高くなりました。ハッキリしています。米がダメになつたんです。農家がもう食べていけなくなつた。うちは1人当たり、1軒当りの農作面積がすごく小さいんです。それでも、非常に良い米が取れるということで、それなりの値段で売れたんですね。それがぜんぜんダメになつてしまった、ということ悲観してしまうことがある。これは、まだ2年くらいの経過ですのもう一度検証しないといけないと思っています。

○秋田こころのネットワーク

先程言いました通り、秋田県は民間団体のとても多いところなんです。最初、民間団体の連絡というのはあまり取れていなかったんです。「蜘蛛の糸」というNPO法人の理事長で佐藤久男さんという方がいます。この人が仕掛人になってですね。自殺対策基本法を作ったんです。この方はライフリンクの清水康之さん達と厚生労働省と一緒に行って、陳情してその後法案が出来た。

このバイタリティに溢れた方が秋田県の民間団体のネットワークを創って、最初9団体が集まりネットワークを作りました。「心のネットワーク」といいます。今では38団体くらいです。最初はただの連絡協議会だったんですが、お互いどんな活動をしているというのが分かればいいなあという程度だったんですね。でもそのうち、それじゃだめで、みんなそれぞれ、例えばカウンセラーの人もいれば、それから、この方は自死遺族の支援活動をしています。皆それぞれ特徴があるんですね。

そういう人達の力を結束すれば、ワンストップで相談に乗っていただけるのではないかとということで、今、「こころの総合相談会」というのを年に4回、5日間かけてやっています。いろんな町にこっちらから出向いて相談会をやるというのをずっと続けているんですね。ひと通り回って、これから2回目に入る。秋田市では常設で、ずっとそこでやっている場所があります。このようにお互いの特徴を生かした活動をしています。



そして、さらに、私達はそういう意思で集った者達ですが、県民を巻き込まないといけないということで、秋田ふきのとう県民運動というのを始めました。

発想は実は北東北で3県集って、民間団体の交流会があったんです。藤里町で会をやった時に、私、佐藤久夫さんに喋ったんですね。「私達がやっていたら、あの人達に任せておけばいいという空気がでてきたんじゃないか。結局また、皆の問題じゃなくて、それに対応する専門家の問題になってませんか。これじゃあ、やっぱりなくならないです。もう1回、秋田県で自殺を考えていきましょう、自死問題を考えていきましょうという、空気を広げていかないといけないじゃありませんか」という話をしました。それで、この運動体ができたんですね。県の職員に諮り、秋田大学に声を掛けたり、連携が取れていましたので、じゃあということで発足のための準備会を作り実行委員会を作り、秋田県の推薦で予算をつけるてもらい、設立総会そしてご覧いただいている県民大会ということになりました。挨拶していただいているのは秋田県の知事、佐竹敬久さん。

県民運動は、年に3回街頭でキャンペーンをやります。知事さんはもちろん秋田市長も出て来

ます。そJR秋田駅の駅頭朝7時10分から行います。一番人通りが多い時間です。年に3回というのは9月10日のWHOの自殺予防デー、12月1日の全国いのちの日、そしてふきのとう県民運動で制定した3月1日の「秋田県いのちの日」。毎回、知事も市長さんも出てきます。オリジナルピンバッジ宣伝をさせていただきます。お手元にですね資料をお配りしました。こういうピンバッジです。この「ふきのとう県民運動」というのは、秋田県民皆でこの問題に向き合おうという趣旨です。私も参加出来る自殺対策の活動というものを考えて、このバッジを作りました。

県民運動は秋田県の補助を受けて活動しています。潤沢にお金があるわけではありません。そして、国の方針によって、県の予算というのはかなり左右されます。今年度で自殺対策基金というのは切れるんです。このあと補助金制度になります。そうすると、秋田県の場合は、予算縮小は見えているんです。活動は続けていかなければならないので、皆に協力してもらおうということでピンバッジを作りました。これも民間団体が頭になると出来るんです。知事さんが頭だったら出来なかったんです。これを今ホームページでワンクリックでも申込できるようにしようとしています。マスコミでこれから宣伝して行って、こういう形でみなさんにも協力してもらいましょうというのを考えています。

秋田ふきのとう県民運動URL：<http://www.fuki-no-tou.net/>

○藤里町社会福祉協議会

藤里町社会福祉協議会はひきこもり対策でそれなりに有名になりました。社協が平成23年、ひきこもりの人達の調査をしました。すると、4,000人の町で113人ひきこもりの人がいるという調査結果がでたんですね。これって、普通に調査したら絶対にでない数字なんです。なぜなら、ひきこもっているということは、ひきこまれる家があって親もしくは家族がいるということです。家族はひきこもっているなんて言いません。なんでこれが調査できたか。社協は先にそういう人達のための働く場所を作っていたんです。ひきこもりたくて、ひきこもっている訳じゃないんです。 たまたま、なにかの拍子で町に帰ってくる。それまでちゃんと働いていて、帰ってきたら働く場所がない。農家もやれない。農地もないからですね。何度もハローワークに行くんだけど、全然職につけなかった。そのうちに1年経ち2年経ち、ハローワークに行くと、「その間なにやりましたか」と必ず聞かれる。履歴書の空白が怖くなって、もう諦めるんです。ひきこもっていると、働いてないというだけで人目を避けて生活をするようになります。そうすると、昼夜逆転になってくるんですって。夜はコンビニに行けたりするんですけど、日中ふらふらしていると、なんでふらふらしてるんだと後ろ指をさされる。そうするとひきこもった状態になっていく。その人達は働く場所があれば働きたかったんですね。社協は先にそれをつくっていた。

ひきこもりに対して、ちゃんとこういうところがありますよと先にお膳立てして調査したら、それだったらということで家族の人達も正直な数を出した。すごいですね。これ、藤里町が特別なんですか。違うと思います。率は高いかもしれないけれども、どこでもあることなんじゃないでしょうか。ひきこまれるからひきこもってる訳ですよ。親がいなくなったら、ひきこもれないんです。じゃあどうなりますか。自死する人もいるかもしれない。または働いていないということで生活保護を受けます。その出費を考えたら、ここで社会に出て行くという

ことをやれたら、その人達はそれによって消費をする訳です。納税もする訳です。そしたら、今お金をかけても、働ける、社会に参加できる仕組みをつくったほうがいい。しかも、社会制度と破綻しかけているような社会保障の部分でも、生活保障の部分でも、軽減されているということになる訳なんです。でもそれをやるために、やっぱり行政が動かなければならない、もしくは社会福祉協議会が動かなければならないんだなど。



○働く場「こみっと」づくり

18年度にひきこもりの事前の実態把握調査をしました。そして22年度に福祉の拠点「こみっと」というのを開設しちゃうんです。ここは働く場所になります。そしてから、全戸調査をした。

この「こみっと」をつくる時、私たまたま社会福祉協議会の役員をやっていました。事務局長という人がすごい化け物みたいな人で、女性なんですけどね。その事務局長が役員会で、私この建物が欲しいと指差した。社協の事務所から見える建物、鉄筋2階建ての本当に丈夫な建物なんです。

それは県のダム管理事務所でした。ダム管理事務所は県の行政の効率化で全く使わなくなった。他の事務所に集約されちゃったんですね。鉄筋の建物と宿泊棟は全く空いていて、事務局長は「これ買いたい」と交渉しました。〇億かかるといわれた。〇億円払っちゃったら、運転資金までなくなるんですね。そこで諦めるかと思ったら、事務局長は自分で町に掛け合いに行きました。町長に「これ欲しいと」。女性は強いですね。泣き落としにあって、町長も「じゃあ俺行ってくる」と県庁に行ったんですね。〇千万円になりました。

〇千万円を社協が出すのではなく、町で出した。そして社協に業務委託した。社協はただで建物を手に入れました。

これを使って社会復帰の建物にしました。そば処をやってます。鉄筋で、ものすごく頑丈に造られていて、ここにはちゃんと食堂とかもあるんです。厨房は大きいのがありまして、ここは事務所になっていて、会議室、それからカラオケルーム、楽しむこともできる。働けなかったらここで1日時間潰してればいいというところにしたんです。ところが、働くにしても、来るにしても、昼夜逆転をなんとかしなきゃいけない。そこで社協の職員は1人1人を迎えに行ったんです。社協はヘルパー事業をやっていますから、朝、高齢者の送迎サービスをやっているのをついでに連れて来ちゃうんですね。昼夜逆転をそれでなくしていったんです。それで働くようになりました。

お食事処『こみっと』



白神まいたけキッシュ



これが厨房です。そば打ちやっています。今はうどんもやっています、讃岐に研修に行ったんです、この人達。讃岐に研修に行って、びっくり、製麺機まで買ってきて。今讃岐うどんとそば、それもセットで、いろいろ付いてくるんですね。そういうのがワンコインで食べられる。そのうちに就労してくるんですよ。就労できる人達はハローワークに行くんです。そこまで行けない人は「こみっとバンク」で働く。人材バンクみたいな感じです。

うちの町でりんどうを作っているのですが、出荷時期の手伝い。あるいは高齢者施設特有の浴槽の掃除。こういうふうな仕事ももらってくるんですね。それぞれに派遣して、なにがしかのお金をもらう。「なにがしか」でいいんです。でないと、ここに居ちやうから。ここでずっと生活する訳じゃないんですね。ここはあくまでも就労支援なんです。でも、わずかでもお金をもらっていると社会参加したことになって、社会復帰になっていくんですね。お金の多寡じゃないんです。今までずっと食い扶持をあてがわれていたのが、自分で働くことによって自立していくんですね。

ハローワークにも職員が一緒について行って、実は「こみっと」というところずっと働いていましたと説明すると「ああそうですか」と職歴にカウントしてくれたりします。

それから「舞茸キッシュ」。今日はパンフレットを持ってきました。一度召し上がってみて下さい。舞茸をたっぷり入れたキッシュです。これは宿泊棟の厨房で作り始めました。そうすると雇用が生まれるんですよ。これはもうしっかり商売になっています。すごい売れ行きなんですね。

事務局長はこの事業はひきこもりの人の「支援」としてやっているのではない、といいます。この人たちが町づくりの戦力だということです。

福祉とは、福祉に預かるべき人を決めてから始まる。例えば、年取いくらになったからこういうふうなサービス、介護度がこのくらいになったからこういうサービスという仕組みでやっていく。その発想でいったら、この活動なんかできない。ひきこもりだからっていう前提で動くんじゃなくて、この人達は社会に復帰したら社会人なんです。それを、私達は目指している。だから、「次世代を創る若者づくり事業」と名付けたんです。全然ひきこもりのための対策じゃない。あなた達が次世代を創っていくんだ、ということで始めた事業なんです。これを聞いた時に、自殺対策も同じだなと思ったんです。

○自分の中の当り前を問い直す

医療モデル・福祉モデルというのは、この人は大変な人だということを前提にしてやります。私達の相談も窓口の一つですが、来て初めてその人に対応できます。でも本当は、自殺対策は、私達が創り上げている社会の中で追い込まれているじゃないのかという自覚から始めないといけないと思うんですね。

どういうことかといったら、先程農村の話をしました。今、福祉制度も子育て制度もみんなが働けるためにそうしましょうということできている。働いていない人は特別な人なんです。そうなってしまうと、ひきこもりも生まれてくる。それから、「助けないということ」を私達は考えなきゃいけない。制度を作るということは、それによって給料を得ている人達(専門家)に助けることを任せ、「私は関係ない」「私は誰も助けない」という仕組みを作り上げる。例えば「子育て」。町では2ヶ月から、未滿時保育に出せる。赤ちゃんが保育士さんに預けられる。お母さんが働けるように。介護もそうです。老々介護の問題がありましたが、うちの町では、おばあちゃんを介護していたら一人働き手がいなくなるから、介護施設に預けるんですね。うちの町は秋田県で一番所得の低い町です。3人働いてやっと一軒の家がやっていけるといったような状況です。そうすると、働くために認知症になったおじいちゃんたちを預かってもらうのはあたりまえのことです。看病は、もう病院に行ったら今は完全看護です。働けるように。

それからお葬式。うちの集落はまだお葬式の葬列をやるんです。誰かが亡くなると、親戚の人がお寺に使いに来て日取りなどを相談します。その親戚の人達が、集落の皆にお知らせをする。そうすると皆が集ってきて、葬儀の準備を始めます。男の人達は茅を取りに行ったり、縄を作って、木を削って葬列の道具を作り始めます。女の人達は台所について料理を作る、縫い物をする、縫い物をするほうは、喪主や親族の人達がつける着物や喪章をさらしで作ります。助け合いだったんですよ。みんなそれを手伝ってたんです。「お弔い(おとむらい)」の形です。今うちの集落にはかろうじて残っている。隣の集落へ行くと、もうないんです。無くなって当たり前になってきた。喪主の装束はあらかじめ作ってたらだめなんですね。「〇〇さん、そろそろ危ない」からと、みんな集って葬儀の準備していたらおかしいわけです。でも、葬儀屋さんはそれをやってる訳です。お弔いじゃないんです。葬儀というのが痩せていくのは、ここですよ。葬儀というのは専門家の私達がいる、こうやりなさいとやっているんじゃないんです。皆で助け合わないといけないことだった。お互い様だった。それをやらなくなるというのは、「私は誰も助けない」ということです。

「迷惑をかけられない」といって亡くなる人達が多いです。迷惑をかけられないと思うのはなぜか。「私は誰も助けない」ということがあるから。そういうふうなものを変えていかないといけない。

社会モデルの根底は、大変な人をピックアップし日常生活から離して、なにかをしてあげるということじゃないんです。私達が創り上げている社会を変えていかなければならない。私達相談員の中にも、相談者は「助けるべき人」っていうふうな思いで向き合っているのではないか。そこが、今日の演題をいただいたときにちょっと考えたところなんですね。

私が支援する側ということになったら、間違うのかなと思っているんです。専門家はそれでいいかもしれません。精神科のお医者さんや福祉の専門家というのは、専門家のスキルを身につ

けています。皆さんのなかに専門家がいらっしゃれば大変失礼なんですけど、私たちが普通の人間としてできることはなんだろう。その人に寄り添う時に大切なことはなんだろうと。それは、その人が特別な人だと思っちゃいけないんだということです。

その思いはどこから出て来るのか。私は「まとも」だという考え方から出てくるのではないか。支援される人はまともだって言ったら、支援される人は「当たり前じゃない人」と見てるんじゃないのか。当たり前生きていない人として見てみませんかということですね。電話相談で聞いていても、「ああ、おかしいな」と思う時ありますよね。この人の考え方は、「あれ、私と違うな」という違和感を覚えることが多々あります。だけど、それって、その人にとっての当たり前のことなんです。気がつくのは、私が当たり前だと思っていることと、その人が当たり前だと思っていることが違うということです。その齟齬みたいなのをしっかりと受け止めなきゃいけないんだなと思っています。

うちの町に湯浅誠さんという方が来られました。湯浅さんが教えてくれたことです。相談を受ける、話を聞くというのは、自分のなかの当たり前を問い直すことだ。これ、とても大事な言葉だなと思って聞きました。私がまともで、あなたが異常で、だから助ける。こういうことになると専門家が助けるという形になっていく。



私も相談しに行く立場になるかもしれないんだけど、その時に、相手と違うことを言うかもしれない。自分の中の当たり前というやつがひとつ崩れないと、その人には寄り添えない。とても大事な言葉だと思いました。

○4つの文化バランス

最後に、時間が来てしまいましたので、お坊さんとして考えていることです。農村も貨幣制度・市場経済・資本主義の世界、お金の世界に翻弄されました。そして今、グローバル市場経済において農家というのがTPPの問題とかありますけど、すごい叩かれています。経済の世界が、実はこの社会を牛耳ってきて、そのことによってひずみがいっぱい生まれてきている。資本主義の考え方からいうと、このことは気にはならないんだなと思ってるんですね。そこで資本主義のことをいろいろ勉強しているんですけど、様々勉強しているなかに、金日坤さんという人が書いた「儒教文化圏の秩序と経済」という題のかなり古い本なんですけど、経済学者の観点で、この方が日本の大学で教えている時に、こういう考え方を出して来ているんですね。

社会文化というのは、実は4つの文化のバランスなんですね。秩序文化というのは、この社会全体みたいなものを秩序立てていく文化なんですけど、その基軸になっているのは、集団文化と

社会集団によって創り上げてきた文化。例えば、日本人であれば嗜(たしな)みであるとか、です。そういうふうなものが集団文化という意味です。

もうひとつ経済文化というのがある。経済活動というのは社会の秩序を創り上げていくことに大変大切なものである。この経済でも秩序はあるんです。信用が大切だとか、というふうな秩序をちゃんと持っていて、これが社会文化を担っていく、その集団を担っていく文化である。そして今度、個人になっていくと、例えば、文学・宗教・哲学のような、ひとつの思考に訴える文化というのがあります。

もうひとつ、あの電気釜欲しいな、あの車欲しいな、という消費生活をしている限り消費文化というのが、一方でとても大切なものとしてあるのだ。

このバランスが大切だということです。成熟した世界に成るためには、このバランスを保たなければいけないんです。今、どうなのか。経済文化、生活文化が進歩文化と言われていて、日々変わる訳です。次の新しいのがどんどん出てくる、それに目先を奪われている。集団や個人というのを創っていく時の基礎になる基軸文化がすごく弱くなっている。

実は経済の世界でも、この4つがバランスが取れた時に、経済がまた新たな力を持ち始めるということです。これが今、バランスが崩れていて、目先が変わるお金の世界で、ひとつ立ち止まって考えることもない。すると専門分化した社会になっていって、「皆でそれを考えましょう」とか、「私の中の私を問い直す」、「当たり前を問い直す」とかということがなくなって、「あの人は弱いからこういう制度で助けましょう。」というように、あつという間に解決できることだけを考えてしまうんですね。それだと本当の意味で苦しんでいる人、それから、悩んでいる人に寄り添えない。本当は苦しむことも悩むことも社会文化を創っていく時に重要な要素だったはずなんです。

快適さ便利さだけで生きていこうとしたら、それが邪魔になっちゃった。本当は人間を創る、社会を創る時に、それをひとつ一つ乗り越えていこうということがとっても大切だったのに、それをしなくなったと思うんですね。それをもう一度私達は考えないと、この社会のひずみで生まれてきた自死の問題も孤独死の問題も実は他人事で、専門家や相談する人に任せればいいということになっている。助けない社会は、いつまでたっても助けない社会。その中で私達は、「人に迷惑をかけてはいけない」という片方だけのたしなみだけが押し付けられてしまう。実はそういうことが自死の問題から見えてくると思いました。1時間ほど、ここでちょっと時間オーバーしてしまいましたが、秋田県の活動と藤里町の活動、そして社協活動から考えたことを述べさせていただきました。どうもありがとうございました。

篠原：どうもありがとうございました。大変明快なお話でございました。現場をお持ちになるだけあって、たくさんのヒントを頂いたと思います。

皆さんご承知かもしれませんが、世界の中で、幸福度を換算して点数をつけたら日本って何位くらいだと思います？ 72位、それはちょっと低過ぎますね。43位ですね。じゃあ一番トップはどこだと思います？ デンマーク、その通りです。2番目がスウェーデンとスイス両方ですね。日本の幸福度がある意味では43位ですから、先進国としては非常に低いという見方が出来ると思います。袴田先生、どうもありがとうございました。

ではここで5分間休憩をいたしまして、今のお話に対しての質問であるとか、あるいは私はこう思うとか、ざっくばらんにお話していただく時間をとりたいと思います。

自殺予防相談員の心得 質疑応答



篠原鋭一氏



袴田俊英氏

篠原：只今の袴田先生のご講義につきまして質問等ありましたらどうぞ。

質問者 A：私、東京の方から来ました浜崎と申します。住職が先程お話のなかにありました清水さんのところで、先程、私聞き漏らしたかどうかなんですが、最初にターミナルケアの話の中で、4つの痛みということがあり、最初の話が宗教的な痛みという話のあと、2つ、3つ、4つ目は、聞き流したかどうか。それをちょっと簡潔で結構ですので・・・。

袴田：先ず、身体的痛みっていうのがあります。これは病気による身体の痛みですね。それから、社会的痛みというのがあります。例えば、それによって働けなくなったので、例えば入院費の問題であるとか、その後の生活であったりと。これはソーシャルワーカーの人達に関わる問題ですね。精神的な痛みというのがあります。精神的な痛みっていうのは、精神科の方々やカウンセラーの方々に協力していただいてそれを緩和するということ。さっき言った宗教的な痛みというのは、本当はスピリチュアルペインっていうんですけど、霊的痛みっていうことなんですね。人間存在そのものまで掘り下げて、死ぬにあたって、私が存在した意味といったところで哲学的というか霊的というか、そういうふうな痛みというのがあると。この4つあるんだと言われてます。

質問者 A：今仰った宗教的なスピリチュアル、結局、簡単に言うと、私勉強不足なんですが、仏教の基本、苦しみ、生まれたところから苦しみ、そこに行き着くんですか。

袴田：そのスピリチュアルペインというのを想定したのが、西欧のというか欧米の医学のほうなんです。やっぱり宗教的な違いって大きいと思います。キリスト教の世界でいうと、「天国にいけるかどうか、」というところが、まず亡くなるにあたって一番の不安なところな訳です。そこにチャプレンという人がいて、カトリックであれば秘儀というのをやるんです。それを行ったり、それから、「私が神に天国に行けるように祈りましょう」というような一言があると、かなり楽になれる訳ですね。

例えば軍隊付のチャプレンとか、消防署付のチャプレンとか、いつでも死を隣り合わせにしている職業の職場には宗教者がいるということになるんです。日本の場合、仏教といいながらも、中国を通して日本に入って来ているなかで、日本の生死観・死生観というのが、やっぱり独特なものがあるんだろうと思って、仏教というくりだけでは語れないくらい、日本人の感性が

あると思うんです。その一番の感性というのは、あの世はこの世の延長であるということじゃないかなと思っているんです。

弔辞なんかでよく、「待っていてくれと、俺もあとから行くから」というのは、あの世でまた会えるということを前提にして考えているんだらうなって思うんですね。だから、天国であろうが、地獄であろうが、この世の延長であるっていうことが大きいので、宗教的な痛み霊的な痛みって言うのが、日本人の場合は、欧米の医学によってそれが「ありますよ」って言われたって、私達僧侶がそれを学んで実際の患者さんに会ったら「いいよ、あんた達いらないよ。」といわれる。そうではなく「あんた達がいつもお寺で喋ってる話をして」と言われるんですね。ということは、宗教の立ち位置やあの世観も、キリスト教と日本の仏教では違うのだろうと思いますね。なので、霊的な痛みというのが仏教でいうところの、縁起だとか空とか苦だとかというくくりとは違うところなんじゃないかと思います。

篠原：ちょっと言いますと、つまり、死を迎えるにあたって私はどこへ行くのですか、という回答が欲しいと言う。宗教者、僧侶だけではなく、キリスト教の神父さんも牧師さんも、この世からあの世への橋渡し役みたいな存在であると。そのところを我々宗教者は非常に見つめ直している。ズバーと切ってしまって、あの世なんかありませんよと言ってしまふのではなくて、そこをどういうふうに、今死を迎えようとしている方々にお伝えするか、寄り添えるか、そのところの問題を仰ってるのだと思いますね。

質問者 A：一番疑問なのは、いろいろ勉強していて、雑学ですけども、結局死ぬことが自然なものとして受け入れられるか、そういう境地にどうしたらなれるかなど。

篠原：良く分かります、その質問はすごくあるんですよ。どういう死に方をするかということの、また別の言い方をします。どう生きたかが、どういうふうな死の迎え方ができるかというふうにく。どうしても生き方を話して、死を迎えるという、迎え方というよりは生き方を見つめていただくことによって、ご自身が死を穏やかに迎えるという境地にいていただけるかというふうなことですよ。

質問者 B：曹洞宗の僧侶の渡部と申します。先程のお話と関連するかと思うんですが、ホスピスのご講話会というのはチャプレンのところと違って、日頃、村の和尚さんがお話をしている日常性を取り戻すことが大切なんじゃないかと仰っていたんですが、そうするとその藤里町というのは日常的にタブーが強いという環境で、よってたもれっていう場所をつくって、ここはタブーなしにいろんなお話をしましょう、というのを語る時に、どのような気持ちで言ったらいいのか。日常が大事と言った時に、ここで、タブーとされているものをどうやって破っていくのか。

袴田：コーヒーサロンで喋っていることは、例えば、話題にのぼらないことはないんですが、自殺の問題もやりますが、要は日常のなかでの関係性ということなんです。それが、農村の生活も、例えば隣の人がどこで働いているかも分からなくなっちゃったんですよ。農業を一緒にやっている時であれば、だいたい分かる訳ですよ。そうするとそのなかで、共同体を創っていく時の、どこまで押していい、どこまで引いていいみたいなどころまで分かっている共同体ってできたものなんです。

それが、人の関係が薄くなってしまって、話をするということもない訳ですね。まず。そういう場所をもう1回作ることが大事なんじゃないかなと思います。昔のように、そのうちにあがって

その縁側に座ってお茶を飲むなんてこと今はしないんです。本当にうちは通勤時間に非常に時間のかかるところなので、みんな外に働きにでると、朝早く出て夜遅くにしか帰ってこない。日曜日は家族を連れて遊びに行くかもしれない。本当に日常の中で他の人と話をしているのは、決まったお茶飲み友達と話をしているだけなんです。それは、きっと、ますます閉鎖していき、ますますタブーを強くすると思うんですよ。閉鎖した関係しかないということは、そのなかで語られてるということは、いわばスキャンダルな話は蜜の味ですから、そういったことが行われていると、お互い疑心暗鬼なんですよ。そういうのを失くすためには、フェイス トゥ フェイスみたいなのが必要で、そこで1回話しをする。コーヒーサロンは相談の場でもないし、自殺を語る場でもないし、自分の良さを披露する場所でもないし、日常の会話をする場所ということなんです。

常連さんの男性というのは、奥様を失くしたとか、結婚しなかったとかで、行く場所がないという人達が結構いるんですね。女性はお茶飲み友達ができ、旦那さんを亡くしても、いろんなところへも行けるんですが、男性はなかなかそういう関係は作れないんですよ。コーヒーサロンがあると、日中ふらふらしてるということが出来る訳です、ここへ来ると。そこで人と話できるってということなので。再び、自分が住んでいる地域のなかのひとりの存在として、また、自分を認識できるというようなことで。

男性は来始めると、結構常連さん率が高いんですよ。ただ、それを周りの人達が、あの人達はちょっと特別な人だと思うんですよ。コーヒーサロンは変な人達が集るところって。私それがすごくいいなって思っています。変な人達が来れるってことは、来易いということですよ。周りの人達がそれを見てるってことは、まだその人達はまともってこと。自分をまともだって思ってる元気がまだある訳です。そうすると、自分が大変だなって思った時に、自分達が作りあげてきたまともさが崩れた時に、行き場所はここしかないだろうなって思います。周りの人達の評価は決して優しいばかりではないけど、それは、「問い直し」の非常にいいきっかけになるんじゃないかと、周りの人に対して。そんなことを思ってます。

篠原：齋藤さんって方がいらっしゃいましたね、齋藤さんがこういう言葉を言っていたらいいなと思いました。「一人でいても一人じゃない、安心して助けてと言える関係づくりこそが高齢者の尊厳を守るセーフティーネットになるのではないかと」。これはですね、実に明快な、一人でいても一人じゃない、このところはよってたもれの存在を証明しているような気がしますね。

袴田：そうですね。



質問者 C：今の話に関連して、お年を召されて、都会にでてお出と。田舎から都会に出て、地方を離れて都会に行く。ところが先程のお話のように、お茶のみの友達もできないし、友達もいない、会話する友達もいないと。そうすると平日のパチンコ屋に行く、おじいちゃん、おばあちゃん

がいっぱいだと。ところが、パチンコ屋だって商売です。いつも儲かる訳じゃないんですね。ダメが続くこともあります。そうすると周りにサラ金がでてくる。今日はだめでも、明日はと言って、サラ金から借りてしまう。そういうことがですね、ずっと利子が溜まってしまおうと、当然家族の知るところになりますので、そうすると親子の関係はますます悪化する。そうすると、子供とすれば心配だから、呼んだんですが、親にとっては大変迷惑な話ですよ。それならば、今まで通り昔からの気楽に話せる環境は大事なんじゃないのと、そう考えました。

袴 田：田舎のほうも、「よってたもれ」に来る人達はごく一部で、職から離れてしまった、もしくは、もう農業もやってないという人は、パチンコ屋にやっぱり行くんだそうです。そっちの人は、周りから見るとパチンコ屋に行く人のほうがまともな人なんです。うちのほうに来る方がおかしいと言われるんですね。これくらい世の中の「まとも」という感性ですが違うのだと思うんですね。

確かに私達は自殺予防という看板を掲げて作った会ですので、そこがやっているコーヒーサロンに来るのはやっぱり普通じゃないと、周りから見られたと思うんです。でも、来た人達はそっちのほうはずっと心地よいと、パチンコ屋よりずっと心地よいと思ってる訳ですね。そういうふうなものが世の中にいっぱいあれば、パチンコに行かなくても、自分のことをちゃんと考えてくれる仲間がいるとか、そういうことがあるといいんだと思います。結局世の中のまともっていうのは、他の人のことは関係ないって言って、生きて行くほうがまともになっているということなんだなと思いますね。そっちのほうが私は問題だと思って、そこをなんとかしていかないとなかなか難しいです、時間もかかるので。

篠 原：マンションにお父さんお母さんに来てもらった後が、大変。お父さんお母さんはとても都会では暮らせない。エレベーターは使えない。隣近所に誰もいない。結局、「私達は帰るよ」と言って帰ったお父さんお母さん方はすっごくいらっしゃいますね。どんなに枯渇状態だろうと、限界集落だと言われようと、1人でもいい、そういう人がいたらそっちのほうが私は住み易い、そういう声を随分聞きました。

質問者D:東尋坊の茂さんが言うておられたのですが、なんで自殺に追い込まれてしまうか、一言で言うと思いやりの無い、欠如した現代社会。あと悩みを抱えていても親身になってきてくれる人がいない。どんなに辛くても手を差し伸べてくれる人がいない。自ら命を絶とうとしている人に共通しているのは、心の闇に閉ざされた孤独感。その孤独感が自分を死に向かわせる。それと先程の質問で助けないと言うのがありましたけど、現代社会は非常に忙しくて自分勝手であるから、人々に助けを求めることはルール違反で、助けてって言うても甘えるなと言うことだから、言うても無駄という諦めになる訳で、無国の民って知っていますか？これはどういうことかと言うと悲しみや苦しみを告げる先が無いということで、無縁社会を構成しているのが無国の民であって、何故人々は無国化して行ったのか、助けてって言うても無駄というリアリティー現実が私たちが自己責任を迫及する社会は助けない社会、自ら無責任さを容認した社会、助けてを封印した社会に抵抗した社会は、大の大人が胸を張って助けてということなんですけど。それが今出来ないから追い込まれる。何でも自己責任と言って一部の人に致命傷を負わせる社会じゃなく、赤の他人同士が傷を分かち合えるような傷を再分配して行くような仕組みづくりが必要かなと思

います。

篠原：仰る通りで、先程お話にもありましたように、実は、自己責任ではなくて、みんなの問題だということ仰いましたよね。袴田さん、私も共通した思いをずっと持っていて、自己責任だと捉えてしまったら、そこでストップしてしまうけれど、これは今の社会の構造から見て、私達が創っているこの社会から生まれてくる苦悩を背負うということだから。実は袴田さんはみんなの問題だと非常に分かりやすく仰いました。連帯責任だと。自己責任ではなく、連帯責任なんだと。あなたにも私にも社会を構成している人間として責任がありますよ、この問題は。他人事ではありませんと仰いましたが、全くそうなんです。

袴田：そういうことです。そして、多分ですね、その責任感を強く感じる真面目な人が、要は最初の犠牲になってしまうじゃないかなと思うんです。それこそ、責任を他者になすり付けられるような人であれば、この世界というのはまだ生きられるんだろうと。

ちょっと別の話をすると、自己責任という考え方というのは、資本主義が必ず抱える問題なんです。資本主義っていうのは、生まれた国、イギリス・アメリカ両方とも、みんなで困ってる人を助けましょうよという法律を一切通さなかった国が創り上げて来たものなんです。救貧法というんですけど、何度も何度も資本主義のひずみで過剰労働している若い人達を助けなきゃいけないとか、貧困に陥った家庭を助けなきゃいけないとか、その法律が何度も出されるんですけども、その人達を助けてしまったら、その人達が自己責任・自己努力で生活をまた立ち直していき、神に認められることを止めてしまう。助けることはいけないことだという、そういう思想が救貧法を認めない国なんです。資本主義はそれを内蔵しているんだと思います。それを私達が知らず知らずのうちに資本主義を取り入れてしまったから、自己責任がものすごく大きくなってしまって、全然違う感性で、全然違う宗教性で生きているのに、仕組みだけは自己責任をすごく問い続けている。結局それを責任として、本当に真面目な人達がそれを感じてしまった時に、本当に折れてしまうんじゃないかなって。そここのところが一番悔しいですよ。

質問者D：だから米国やイングランドは幸福度が低いわけですね。アジアで言えばブータンがナンバー1ですね。何故かって言ったらやっぱりグロス・ナショナルハピネスという言葉知っていますか？国民総幸福量97パーセントが幸福といっている訳ですね。まあ、何故そんなに幸福かていうと、経済的なGDPに関しては日本の3千何分の1しかないのです。それでもやっぱり村民が村民であって他人じゃないってことですね。家族やまわりの人々がネットワークが確立されているわけです。だけど今の日本っていうのはバラバラで、家族関係が希薄でしかも親族間の殺人事件は世界でナンバーワン。ワーストワン。これくらいボロボロな訳です。何故かと言ったら全部成果主義ですよ。何でもかんでも。それが米国の真似をしているからです。そういうことを見つめ直さなくてはいけませんよ。家族の中でも一番感受性が強い人が犠牲になります。家族の危機を救うために病気を発症している訳ですから。そう言う事は家族もわかっていないんでしょう。それが問題ですね。

篠原：平たく言えば、みんなの顔が見えてるか見えてないか、先程、袴田さんのお話の中にも農村の話があった。前にもお話しましたが、農村型社会という、かつて日本が持っていた社会っていうのは、長短あったことはあったんですけど、少なくとも地域の顔が皆見えている。赤ん坊からお年寄りまで皆お互いが農作業に出る。顔が見えるということはお節介もたくさんあった。それから先程仰った重要なことは、冠婚葬祭は、皆でやった。冠婚葬祭をやるっていうことは

そのプロセスで人が育った。そういうふうなことを、どうも我々、都市型社会になった時に置いて来ちゃったと。と言って、農村型社会に帰ることはできないけれど、農村型社会が持っていた部分を、もう少し取り返すことは出来ないのかというふうなことなのでしょうね。

袴 田：お葬式なんかでも、今終活が流行ったり、葬儀の費用まで面倒見る保険が出来たりしてますよね、でも、それって、死んでからも一人ということですよ。

それが、なんで行われているかという、みんなに迷惑をかけたくない。ということは、私は誰が死んでも助けないということですよ。田舎の方のお葬式というのは、うちの集落155戸くらいあるんですけど、誰かが亡くなるとお香典を持っていく。「お水をあげる」といういかたをします。その時一緒に、なにがしかのお金を置いてくるんです。それを葬儀の費用にしてくれということなんですよ。みんながそれをやりますから、自分もやっている訳ですよ。すると、自分の時はやってもらえると思ってる訳です。終活しなくてもいい、葬儀屋さんに積み立てなくてもいい訳です。それはすごい「安心」だと思うんですよ。

これは都会の下町のほうだつて、やっていたことだろうと思うんですよ。迷惑をかけたくないってことは、自分も香典は持っていないということですよ。そういうところをちょっと考えていくと、私の関係ある人には、誰かが亡くなったなと思ったら、弔問に行つて香典をあげてくれるというくらい関係性は取り戻せるんじゃないかと思っています。

篠 原：葬儀ということだけじゃなくて、神社の祭りでも、みんなで作つて、そこで叱られたり、お前そんなことじゃだめなんだと言って、地域で育てられ、認知されて成長していった。段々、地域社会の一人として認められたみたいなのところがあつて。社会が人を育てたという、そのあたりのことを、どこかに置いて来ちゃったんですよ。

質問者D：あまりにも経済至上主義になったということがありますよね。

篠 原：豊かであることが罪でもないし、貧しいことも罪でもない。だけどそのところで、人と人との関わり、袴田さんのお話になったように、迷惑をかけることは決して悪くはない。だから、迷惑をかけられたらどうなのという、双方迷惑をかけたりかけられたりすることがないことは、そこまで話しが、なかなか今の時代できないのでしょうか。

質問者E：ありがとうございます。私自身、お節介が社会を変えようと思つている人間の一人なんです、今の時代ですね、袴田さんのお話をお伺いして、専門家がよくアウトリーチの解釈っていうのは、助ける文化、寄り添う文化というのも、手を出すような形の認識でアウトリーチの解釈をしていいものなのかなってことが一点と、4つの痛み、宗教的な痛み、肉体的と、精神的ともう1つはなになつて。

篠 原：社会的痛み。

袴 田：それこそアウトリーチの考え方も、相談窓口の考え方も、とても大切な考え方なんです。それを否定するものではないです。専門家の人達の関わりもすごく濃くなって来てますし、それはこの自殺問題が社会問題だと取り上げられているからなんです。

要はそういうふうな動きというのが、社会問題と言いながら、専門家だけに任せていく、あるいは制度だけに任せてきたのが、これまで様々な問題が出てきた時の私達の対処の仕方だったんです。例えばこの間の震災で原発が事故になって、これをなんとかしましようと言つた時、みんな節電した。その前にも1回節電の動きがあつたんですけど、原油が騰がった時でしたかね。そんな時には皆で考えなきゃいけないって、節電したんですよ。

交通事故なんかは、全国的な動きも、県民運動的なこともあって、これだけ少なくなった。産業界も事故に対応した車を作ったりして、どんどん変わっていきました。そういうふうな、ある問題を切り口として、私達ももっと深く考えていくということ、社会問題の1つ解決の方法として持っていなきやいけないんじゃないかなというのが私の考え方なんです。

だから、専門家が様々な形で関わっていくことは大事です。窓口が出来ていく、相談する場所が増えるということは間違いなくよいことなんですけど、それとともに私になにができるかということも考えなきやいけないと思っていることが、今日の話の趣旨です。

篠原：以前にご講義いただきました旭神経内科リハビリテーション病院院長の旭俊臣先生がお出で下さいましたので、先生、アウトリーチというのは、ご専門の立場からどう受け止めればいいのか、教えて頂けますでしょうか。すみません突然に。

旭先生：精神科の医者をやっておりますけれど、よくなかなか引きこもりの方が病院に来るとするのは、非常に少なく、一応家族に連れられて来るのですが、話を聞いてみると、家で引きこもり行ってみるといろいろな問題が有り、ではこちらから出かけて行けば、もうちょっと何かなるかという所で最近保健婦さんだとか、看護婦さんだとかいろいろなリハビリのスタッフが出かけて行って、最初は非常に閉ざされていたが、何回も行っていると段々コミュニケーションが出来てきて、やっぱり少しずつ枠が取れてくる経験する。最初は行って拒否されることもあるんですけど、引きこもり10年とか20年とか。一生懸命出かけて行ってはドアの前で一方的にしゃべり続けているうちに段々垣根がとれてくる。それは、アウトリーチというのはきっかけになるのだと思います。千葉県松戸常盤台団地と言う所で53歳の方が、所謂孤独死で発見された時、白骨死体で発見され、全国的に衝撃があったのですが、それが教訓として、やはり出来るだけ一人暮らしの人の所に声をかけて行こうと、そうすると自ら好んで引きこもりになっている人というよりも、自分が外に出て行こうとする勇気がないのですね。そういう人で実は声をかけてくれるなら、来てほしいと言う人が7割くらいいると言われてます。それから毎日の呼びかけ、朝カーテンがしまっていたら呼びかけ、夜ライトがないと呼び掛けるなどやっている内に段々出てきて、入ってみたらゴミ屋敷だったとか。半年くらいたって集会場にくるようになった。そのためには何年もかかったのですが、いい意味でのおせっかいなんですね。

篠原：大変にありがとうございました。突然に、ご専門の立場でお話いただきました。

質問者 F：クライアントの方がお話を伺いして、私も相談に乗るんですが、アウトリーチというか、病院の診察室とか、カウンセリングルームってアウェイなんですよね。クライアントにしてみれば。やはり喫茶店でもクライアントさんの家でも、リラックスできる場所。そういう利用者の方が心をときほぐせるような場所で接していったらいいのかと思う。

篠原：そういう意味で「よってたもれ」は、大変、町のなかで工夫されている。私事で言えば、解放されてるお寺とか、自然が目の前にあるところで対話させていただくと、ゆっくりと心が開いて、最初は「ほっとします」ということから始まっています。仰るように、相談する環境だとか、相談の場所だとか、会話だとか、声だとか、大変影響していくんだらうという気がしています。他にいらっしゃいますかご質問、なければ、ちょっと私から。

総合相談会というお話がでましたね、これは地域巡回なさっている訳ですか？

袴 田：はい、そうですね。

篠 原：ちょっとその内容を、行政の方もいらっしゃるので、ちょっとお話いただけますか。

袴 田：さっき申し上げましたように、民間団体が集まって来たら、産業カウンセラーの人もいれば、老人クラブの人たちのなかで相談をする人もいれば、経済問題に関してはかなり突っ込んで、ほぼ弁護士さんのような仕事もできる人もいれば、そういうふうなことをやっている人達が集まってきている訳です。

そういう人達がみんな集まれば、なにか問題を抱えて苦しいという人達に対応できる。問題って1つじゃないって言うことがよく言われますが、経済問題で相談に来たけれど実は家族観家の問題だったなどということがいっぱいあるので、一人の人の相談にみんなで考えてみようということなんです。

自分の町での相談会だと行けないということがあるので、巡回して例えば隣町の人に来れるようにしました。こちらから様々な街に行くんです。その町で5日間行きます。その5日の間に弁護士さんが入る日を決めたり、司法書士さんが入る日を決めて、専門家に相談しなければいけない人はその日に来てもらうということにしています。

1日に来るのは2人くらいです。費用対効果で行ったら悪いかもしれない。でも、1人のためにみんながいるということも大事だと思います。ボランティアだからできることだと思います。もちろん弁護士さんたちにはお支払いしますが…。

この活動は県の補助金でやっています。会場の設定には市町村が関わります。広報はその市町村の公報と新聞で行います。新聞広告は補助金で行います。年4回行いますが、1会場につき2回新聞広告を出します。結構なお金になりますが、県と話し合ってお金を出して貰っています。これは行政の協力がなくなかなかできないかな。

自殺防止相談員育成講座修了

ご参考 我が国における自殺の現状（平成26年度速報値）

わが国の平成26年度の自殺者総数は25,374人（速報値）で、前年の平成25年は27,283人で、対比1,909人の減少となった。昨年度に引き続き3万人を割り、前年比93%と減少傾向を示している。平成10年以降、14年連続して3万人を超える状態が続いていたが、平成24年は27,858人であり、平成9年以来、15年振りに3万人を下回った。自殺者数は、昭和58年及び61年に25,000人を超えたものの、平成3年には21,084人まで減少し、その後2万人台前半で推移していた。しかし、平成10年に平成9年の24,391人から8,472人（34.7%）増加して32,863人となり、その後、平成15年には統計を取り始めた昭和53年以降で最多の34,427人となった。平成16年は減少し、平成21年まで横ばいで推移した後、平成22年以降は減少を続けており、平成24年は27,858人で前年に比べ2,793人（9.1%）減少した。

NPO法人自殺防止ネットワーク風 法人概要

法人設立から今日までの経緯

- 平成14年12月 曹洞宗千葉県宗務所所長に就任。宗務所並びに曹洞宗内外で自殺防止に関し連携、自殺防止相談を賛同者と共に始める。
- 平成15年12月 若手僧侶等電話自殺防止相談“てるてるぼうず（TELTEL 坊主）”を開設。以後自殺防止活動を継続し行う体制を整える。
- 平成21年3月 賛同者と共に“自殺防止ネットワーク風”を設立、特定非営利活動法人格を取得。設立当初3カ所の相談所でスタート。その後全国に相談所を拡充。
- 平成22年11月 公益財団法人社会貢献支援財団より“平成22年社会貢献者表彰”を受ける。
- 平成23年3月 東日本大震災被災地を訪ね、被災者に対する傾聴活動を始める。
- 平成25年3月 「命の大切さを語る集いとふれあいコンサート」を千葉市文化センターで開催。
- 平成25年10月～11月 「大切な命のための相談会」を千葉県内の協力寺院で開催。
- 平成26年4月～ 千葉県内の小学校・中学校・高校の10校に対し講師を派遣、子供達に対して命の尊さを伝える啓発課外授業を実施中。
- 平成26年10月22日・平成27年2月18日 自殺予防相談員無料育成講座「相談員の心得」開催。
- 平成27年2月現在 全国56カ所の相談所ネットワーク。年間5,000人以上から相談を受ける。

法人概要

- 法人名 特定非営利活動法人自殺防止ネットワーク風
- 設立 平成21年3月11日
- 設立目的 自殺を示唆または志願する者並びに自殺未遂者及び自殺者遺族に対し、自殺予防・防止並びに自殺未遂者及び自殺者遺族のケアに関する事業を行い、自殺の少ない、生きやすい、明るい社会の実現に寄与することを目的とする。
- 所在地 本部 千葉県成田市名古屋346 電話 0476-96-3908
東京相談所 東京都豊島区南大塚1-51-18-201 電話 03-6912-1012
- 役員 理事長 篠原鋭一 副理事長 竹下八郎 袴田俊英 理事：此経啓助 伊地智市子
監事 八代元行 会員 30名



NPO法人自殺防止ネットワーク風 全国相談所

	都道府県	寺院名	住職名	住 所	電話番号
1	本部	本部	篠原 鋭一	成田市名古屋3 4 6	0476-96-3908
2	北海道	寶積院	新田 忍澄	札幌市白石区菊水元町八条1-15-6	090-4024-0119
3	秋田県	月宗寺	袴田 俊英	山本郡藤里町大沢字向山下89	090-3120-4620
4	山形県	松林寺	三部 義道	最上郡最上町大字富沢1826-1	090-2276-3066
5	岩手県	岩手相談所	建部 仁	一関市五十人町51	090-7525-6099
6	宮城県	通大寺	金田 諦應	栗原市築館薬師3-6-8	090-8787-0783
7	福島県	長秀院	渡辺 祥文	福島市田沢字寺の前1 8	024-548-1240
8	東京都	東京相談所	伊地智市子	豊島区南大塚1-51-18-201	03-6912-1012
9	東京都	正山寺	前田 宥全	港区三田4-8-20	03-3452-3574
10	東京都	—	新田 忍澄	板橋区西台2-3-32	090-4024-0119
11	東京都	仏の赤川塾	赤川 浄友	中野区弥生町4-24-1-314	090-4533-5090
12	千葉県	長寿院	篠原 鋭一	成田市名古屋346	0476-96-2204
13	千葉県	真光寺	岡本 和幸	袖ヶ浦市川原井634	090-8103-8582
14	千葉県	NPO法人 印旛たすけあい ネット	金子 修	成田市南平台1143-59	080-3730-3294
15	千葉県	元倡寺	大塚 秀禅	山武市成東2697	0475-82-2028
16	千葉県	瑞岩寺	伊藤 仁志	南房総市宮下108-1	0470-46-2814
17	神奈川県	養周院	上形 泰俊	川崎市高津区久地3-10-32	090-2548-8299
18	神奈川県	臥牛院	藤木 隆宣	相模原市緑区谷原2-9-5-5	090-3066-7406
19	群馬県	—	生沼 宏元	富岡市上高尾700	0274-62-1600
20	群馬県	瑞岩寺	長谷川俊道	太田市矢田堀町388	0276-37-1231
21	群馬県	三松会	塚田 一晃	館林市高根町109	0276-75-4732
22	群馬県	長楽寺	峯岸 正典	甘楽郡下仁田町本宿3788	0274-84-2518
23	群馬県	川龍寺	今橋 憲雄	利根郡昭和村貝野瀬1129	0278-22-3387
24	群馬県	長岡寺	酒井 晃洋	太田市西長岡町728	0276-47-3009
25	新潟県	東岸寺	野田 尚道	村上市荒島1055	0254-62-4367
26	新潟県	称光寺	林 道夫	佐渡市宿根木468	0259-86-3118
27	新潟県	布施庵	児玉 浄信	新発田市下石川639	0254-29-3666
28	新潟県	慈眼寺	船岡 芳英	小千谷市平成2-3-35	0258-82-2495
29	長野県	法泉寺	丸山 素香	長野市松代町西條293	090-1765-3608

30	静岡県	龍谷寺	笛岡 賢司	浜松市南区飯田町 628-1	053-463-2360
31	石川県	世尊院	安念密富	白山市長屋町イ 116-4	090-3115-1626
32	富山県	本淨寺	佐藤 崇道	富山市東老田 274	0764-36-6475
33	愛知県	地藏寺	神野 哲州	名古屋市天白区島田 3-113	052-801-0432
34	岐阜県	大禪寺	根本 紹徹	関市上大野 355	080-3716-2988
35	滋賀県	洞源寺	奥谷 良晃	高島市拝戸 1080	080-6150-0739
36	三重県	萬重寺	西 育範	熊野市育生町長井 220	090-7694-4202
37	三重県	龍光寺	衣斐 賢讓	鈴鹿市神戸二丁目 20-8	059-382-1189
38	大阪府	親蓮坊	名倉 幹	豊中市新千里南町 3-27-3	090-3278-5687
39	奈良県	景德寺	畑 圓忍	吉野郡上北山村大字河合 136	07468-2-0052
40	奈良県	平等寺	丸子 孝仁	桜井市三輪 38	090-7119-8767
41	兵庫県	宝林寺	飯田 正人	丹波市青垣町栗住野 1104	079-587-0869
42	広島県	超覚寺	和田 隆恩	広島市中区八丁堀 5-2	090-9999-3113
43	広島県	知足庵	柚原 康峰	呉市安浦町中畑立小路 509-42	090-3740-4453
44	山口県	慶福寺	西本 慶雅	岩国市周東町中山 141-5	0827-84-0867
45	愛媛県	安国寺	浅野 泰巖	東温市則之内甲 2781	089-966-3647
46	愛媛県	仙遊寺	小山田弘憲	今治市玉川町別所甲 483	0898-55-2141
47	徳島県	八棒寺	京寛 和房	阿南市長生町宮内 464-1	090-2780-3954
48	長崎県	天福寺	塩屋 秀見	長崎市榎山町 8 8 7	095-850-1316
49	長崎県	正覚寺	雲山 暁春	長崎市矢上町 13-25	080-1719-6711
50	佐賀県	普恩寺	金子 謙三	東松浦郡玄海町普恩寺 369	090-2078-7830
51	大分県	龍興寺	林 浩道	大分市徳島 1 丁目 7-27	097-527-3767
52	熊本県	地藏院	荒木 正昭	上天草市松島町阿村 1061	090-3013-7141
53	熊本県	法泉寺	藤井 慶峰	宇土市神馬町 708	0964-22-0471
54	熊本県	泰巖寺	磯田 浩隆	熊本市下通 2-7-18	090-2397-9004
55	鹿児島県	花林寺	小野 静妙	霧島市霧島田口 2614-1	090-4775-7867
56	ニューヨーク	親蓮坊	名倉 幹	P. O. Box 103. NewYork. NY10113. USA	1(米国) - 917-769-8253

相談所 全国56カ所、米国1カ所 (平成27年3月現在)



NPO法人自殺防止ネットワーク風

本部：千葉県成田市名古屋346 0476-96-3908

東京相談所：東京都豊島区南大塚 1-51-18-201 03-6912-1012